

吟遊詩人の宇宙

松田 美緒

プロフィール
1979年秋田県生まれ。歌手。2005年に「ア
トラネイカ」でデビュー。2014年のCD「フ
ク・クレオール・ニッポン」うたの記憶を旅する
で文藝春秋「日本を代表する女性120人」に選
ばれる。2017年、本館研究公演「めばえる歌
——民謡の伝承と創造」に出演。世界各地のミュー
ジシャンと共演、アルバム制作を重ねている。

六月、最近二緒にお仕事をしている土取利行さん
がインドの吟遊詩人のパルバティ・バウルさんと郡
上八幡で共演すると聞き、京都からかけつけた。バ
ウルはインドのベンガル地方で古代から続く行者の
伝統であり、宗教の境を超越し、歌と踊りで門付け
をする人たちだという。数少ない女性バウルである
パルバティさんは、ある日タゴールが創設した音楽
院に向かう電車の中で一弦琴（エクタル）をつま弾き
歌う盲目のバウルに出遭い、衝撃を受け、バウルと
して人生を歩む決意をしたという。彼女の本は日本
語でも出版され、これまで外から覗かれ描かれただ
けだったバウルの世界を内側から世界に知らしめた。
また、近年、八世紀の仏教詩をバウルの歌として甦
らせている。

さて、郡上八幡のお寺でのコンサート当日、リハー
サルで彼女が発した歌声は衝撃的なものだった。永
遠に伸びるかのようなロングトーン、恍惚としたエ
ネルギーの奔流、波打つ旋律。エクタルの鈍い金属
弦の響きとドゥギという太鼓によって音の磁場が作
られ、そこに加わる土取さんの優美な弦楽器エスラ
ジが聖地を作り出していた。世界中にある恋愛や
自然の営み、喜怒哀楽を歌う歌とも、他人を祝福
する芸とも、まったく別の次元を見せられてしまっ
た。それは天界のありがたい宗教音楽でもない。き
れいごとでない生身の存在が、無限に達するための
歌である。声はひとすじの道のように巡回しながら

詩をなぞる。彼女がここまで音を伸ばすべき詩があ
ること、その詩は歴代のバウルの導師たちが修行の
体験によって会得した智であり、真理の探求なのだ
ということ、それを生み出したインドの永く重層的
な時の流れがそのまま押し寄せるかのごとく、しば
し激流に心身をさらした。「祈り」や「宗教」とい
う言葉も表面的に思えてくる。神にすがるのではな
く、知識で理解するものでもなく、行によってこそ
真理を探し求める。そして、踊りや歌こそが行である。

「詩を歌い踊ることはバウルにとって途切れ
ることのない瞑想の旅路を歩むことと同じな
のです」（パルバティ・バウル『大いなる魂のう
た』佐藤友美訳、「バウルの響き」製作実行委員会、
二〇一八年）

パルバティさんにバウルは何をうたっているのだと
かと尋ねると、unconditional love（無条件の愛）と
答えた。この愛は compassion（憐れみ）であると。
西洋キリスト教的なイメージを持つこうした言葉
もその歌を聴くとまったく違った次元で迫ってくる。
原初の一弦楽器、エクタルは unity（統合）を表すの
だという。二元性の世界を超越した統合の響きなの
だと。音楽も名づけられ切り売られる消費社会の
真つただ中であって、彼女が垣間見せてくれた吟遊
詩人の宇宙に心揺さぶられた。

月刊 みんな

10月号目次

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 1 | エッセイ 千字文
吟遊詩人の宇宙
松田 美緒 | 12 | みんなく Information |
| | 特集 門付け再考
——家を訪ねる芸能の諸相 | 14 | 想像界の生物相
カワウソ老いて河童になる？
卯田 宗平 |
| 2 | 現代に生き続ける門付け芸能
神野 知恵 | 16 | 新世紀ミュージアム
国立台湾美術館
相良 啓子 |
| 4 | 歴史を重ねる伊勢大神楽
黛 友明 | 18 | シネ倶楽部 M
冒頭数分の挑戦
——「少女は自転車にのって」
菅瀬 晶子 |
| 5 | 福を運ぶ三番叟まわし
辻本 一英 | 20 | ながなんちゃ
霧の中の出会い
——複数の名前をもつ人びと
石倉 敏明 |
| 7 | 死者と生者をつなぐニムチャー衆
——八重山・小浜島の旧盆
酒井 正子 | 21 | 次号予告・編集後記 |
| 8 | 春を呼ぶ黒森神楽
遠藤 協 | | |
| 10 | 〇〇してみました世界のフィールド
社会主義期の音を聞く
八木 風輝 | | |

門付け再考

家を訪ねる芸能の諸相

人びとの生活の場である家を芸能者が訪れ、舞や唄などで祝福することで豊かな暮らしを願う「門付け」。本特集では、日本の専業の芸能者、村人による正月・盆の家廻り行事を中心に紹介し、現代社会において門付けが果たす役割や意味についてあらためて考えてみたい。

かみのちえ
神野知恵 民博機関研究員

現代に生き続ける門付け芸能

韓国の家廻り行事に参加させてもらう

韓国の打楽器芸能「農楽」は、旧正月の村祭りや演じられてきた。筆者は留学中だった二〇〇七年の旧正月に、全羅北道高敞郡で村の農楽隊の一員として祭りに参加させてもらった。家々を二軒一軒廻り、カマド（台所）や井戸、味噌甕棚などに宿る神々を祀り、庭を踏み鳴らして厄祓いの演舞をした後、家のお母さん御手製のキムチや茹で豚、マッコリなどで接待を受け、ご祝儀を頂いた。それを一日何十軒も繰り返した。日本では話にだけ聞いていた「門付け」を韓国で先に体験してしまったのだ。韓国語ではこうした行事を「地神踏み」や「埋鬼」などとよぶ。

現在でも、このような村人自身による家廻り行事は残っているが、むかしは広範囲の村々を廻り稼ぐ男寺堂などの放浪芸能者の存在もあった。それが生業である場合とそうでない場合では村を廻る目的が異なるが、儀礼のプロセスはほぼ同じである。どちらの場合でも、迎える側は芸能者たちを手厚くもてなす。なぜなら彼らは鉦や太鼓の音力強い舞踊、呪文によって邪気を祓い、家の神を祀ってくれる有難い存在だからである。全羅道の田舎にはそうした風習が今も残っている。

日本の門付けの多様性

日本にも以前は万歳、木偶まわし、猿まわし、

大神楽、瞽女、春駒など多様な門付けの職能者がいたが、現在その多くは失われてしまった。例外的に、伊勢大神楽は現在も西日本一帯で毎年決まって同じ時期に同じ地域を訪ね、カマドを清め庭先で獅子舞を奉納する活動を職業にしている。また東北の三陸沿岸では正月になると黒森神楽、鶴鳥神楽が広範囲で権現舞（獅子舞）による巡業をおこなっている。阿波の三番叟まわしは戦後細々とおこなわれてきたが、二〇年程前から阿波木偶箱まわし保存会により巡業地の見事な継承がなされた。

また、日本でも村人たちが家々で芸能を演じる行事は各地に見られる。特に東北では盛んで、「門打ち」「庭借り」などとよばれる。青森県八戸市では夏の三社大祭のときに町中で権現舞、虎舞、山車組などが門付けする姿を見かける。また東北の盆には鹿踊、剣舞、さんさ、じゃんがらなどが村を廻って死者供養をおこなう。岩手県大船渡市越喜来の浦浜念仏剣舞は、毎年欠かさず八月七日に新盆の家を訪れ、故人の位牌と遺影の前で剣舞を舞う「初茶供養」をおこなっている。地区も保存団体も津波

による甚大な被害を受けたが、盆の家廻りは途絶えるどころか、むしろその重要性を増した。

奄美沖繩諸島にも旧盆に家々を廻る行事が多く、島を出た若者もその時期には帰ってくるという。今年度、ユネスコの無形文化遺産保護条約政府間



上：岩手県大船渡市の浦浜念仏剣舞による初茶供養（2016年）
下：舞川鹿子躍保存会（岩手県一関市）および東京鹿踊と高敞農楽保存会の交流企画により韓国での合同門付けが実現した（韓国高敞郡星松面、2018年）



農楽による門付け（韓国高敞郡新林面、2014年）

委員会「来訪神行事」が審議されるが、なまはげなど異形の神々が家を訪ね子どもたちを叱る行事にも、門付けと似た要素が見られる。

門付けはなくなる？ なくならない？

こうした家廻り行事の担い手たちは共通して「金儲けのためにやっているわけではない」と強調する。結果として報酬を頂くことはあっても、あくまで各家の祖先や神々を祀る儀礼だという。だが門付けという行為は常にそうした際どい視線にさらされてきた。だからこそ、門付けを生業とした芸能者の多くが姿を潜めてしまったのだろう。

それでも家廻りの芸能がなくならない理由は何だろうか。近代的な公演では観客が劇場に足を運ぶが、門付けでは逆に芸能者が神様を連れて家に戻ってくる。時代とともにそうした信心が薄れるかと思いきや、獅子舞や三番叟まわしなどを楽しみに待つ人びとはたくさんいる。マンションに引越しても来て欲しいという。衣食住や家庭生活、経済活動の空間である「家」に良い運気を引き込みたいという現実的な願いは、思った以上に消えにくいかもしれない。

その意味では、近年増えている老人ホームでの公演なども「現代の門付け」といえるかもしれない。震災以降、避難所や仮設住宅での音楽会も見られるが、それらの現場でも「この公演によって少しでも安らぎと癒しを得て、この場所でもより良い暮らしを送れるように」と願う心理があるのではないだろうか。

歴史を重ねる伊勢大神楽

黛友明 市川市文化振興課 市史編さん事業担当

伊勢大神楽を手伝う

芸能をしながら廻村するというのは、どういう経験なのだろうか。姿を消しかけていた、放浪芸に着目することで、この問題に迫ったのは、俳優の故小沢昭一だった。その小沢が、目を見張った芸能が、獅子舞と放下芸（ジャグリングや、体を張った曲芸）をおこなう伊勢大神楽であった。

伊勢大神楽は、江戸時代の初めから活動が確認



舞手は獅子頭を担いで、次々と家を廻っていく。道具を運び、初穂を入れるために長持もリヤカーに乗せて移動させる（加藤菊太夫組、2011年）

がつまった独自性が生まれるのだ。以前は今よりも型の決まりが緩かったため、なおさらその違いが際立っていた。戦後まもない時期を経験した担い手たちによれば、「あの人に舞ってほしい」とい



大晦日には長持に鏡餅と灯明を供える（加藤菊太夫組、2013年）

できると同時に、旅廻りのあり方をも現在に伝える貴重な存在だ。宗教法人伊勢大神楽講社（三重県桑名市、国指定重要無形民俗文化財）に所属する山本源太夫組、森本忠太夫組、加藤菊太夫組、山本勘太夫組、石川源太夫組、紀州支部山城修社中の担い手の多くが、一年かけて近畿・北陸・中国地方を廻村し、各家をお祝いし、総舞とよばれる、広場で獅子舞と放下芸を披露する生活を送っている。そのなかのひとつである、加藤菊太夫組に通い始めて少し経ったころ、「やらなきゃわからんよ」と言われ、はじめて手伝いをさせてもらったのは、二〇二一年の一月のことだった。着物を借りて着付けてもらい、夜が明ける前に出発し、朝から晩まで家から家へと廻る経験をした。

手伝いといってもわたしにできることといえば、後持ちという獅子の幕をもつ役目のほか、訪問先が出してくれる初穂（米や酒）を運び、お宮の乗った長持を引き、たまに太鼓を叩かせてもらうぐらいだった。これらは伊勢大神楽に入った新人が初めにおこなう仕事だ。単純な作業と思いきや、ただいたお米を米袋に入れるときにこぼしたり、幕を引つ張りすぎて舞手に苦勞させたり、長持がうまく操れずに重さで踊らされたりなど、失敗ばかりだった。次々と慣れた足取りで家々を廻って

う「ご指名」が観客からなされることもあったという。まさに、演じる側と見る側の好みが反映される「芸」だったのである。

しかし、単なる「芸」ととらえることも正確とはいえない。伊勢大神楽は、毎年、同じ時期に檀那場という決まったテリトリーを巡回している。訪問先との関係は一年に一度ではあるが、それが世代を超えて繰り返されることによって濃密で複雑なものとなっている。加藤菊太夫親方は、それを「親戚のようなものだ」と表現したが、そのとおりだ。毎年の訪問が積み重ねられるということ、は、伊勢大神楽の来訪という状況のなかに、たくさん経験が蓄積され、「歴史」を形成していくこ



各家の前で、獅子舞による「悪魔祓い」がおこなわれる（加藤菊太夫組、2011年）

芸の楽しみ、歴史の重み

伊勢大神楽では、獅子舞でも放下芸でも、笛でも太鼓でも、各自が自分の理想とする「師匠」をもっている。師匠は現役の人とは限らない。すでに亡くなっている、音源や映像のなかにしかない人でも師匠たりうる。だから、流派や個性ということばだけでは片付けられない、その担い手の思い



みんばくで開催した山本勘太夫組による「伊勢大神楽の獅子舞と放下芸」伊勢大神楽講社による総舞（撮影：神野知恵、2016年）

とを意味する。つまり、伊勢大神楽の旅廻りとは、楽しみだけではなく、そういった歴史の重みをも背負っていくことでもあるように思えるのだ。

福を運ぶ三番叟まわし

阿波木偶三番叟まわしとは

阿波木偶三番叟まわし（徳島県指定無形民俗文化財）は、人形遣いと鼓打ちの二人がひと組となり、四体の人形（千歳・翁・三番叟・エビス）を木箱や行李に入れて村々を廻る門付け芸である。

門付けでは、まず荒神に御幣を供え祭祀する。「式三番叟」を演じて五穀豊穡や無病息災を祈り、

続いて「エビス」を舞わして商売繁昌や豊漁を予祝した。人形を一人で遣い詞章も自ら語る。また、人形を箱から出し入れするなど独特な形態をもつ。受け継がれた木偶の門付け

三番叟まわしは、江戸期から四国の正月儀礼として定着し、明治初年の芸人は二〇〇人以上を数

辻本一英 芝原生活文化研究所代表

えたと人形師初代天狗久（二八五八―一九四三）は語っている。しかし、太平洋戦争を境に芸人は減少し、高度経済成長期には激減する。かつての巡業先は四国一円を中心とし瀬戸内の島嶼部までおよんでいたが、戦後は芸人の数も減少の一途をたどり一九七〇年代には一部の地域でしか見られなくなった。現在、三番叟まわしの門付けをおこなっている

のは、阿波木偶箱まわし保存会（徳島市）のみであるが、当保存会は、徳島県東みよし町の門付け芸人（一九三二―二〇〇二）に弟子入りし、門付け先として、徳島県内および香川県・愛媛県の一部を受け継ぎ、現在に至っている。二〇一八年には、一〇六〇軒の民家に福を届けた。

祓い清めて五穀豊穡を予祝

三番叟まわしが祭祀する対象は、荒神・水神・えびす神・稲荷・方除神・同族神・集落の産土神（徳島県三好市、2008年）



民家の門付け。クライマックスでは三番叟が黒式尉面（こくしきじょうめん）をつけて舞う（徳島県三好市、2008年）

獣害に苦しむ

農家では、田畑

を拝み御幣を立て

てる例もある。芸

人は、荒神をはじめ

家に祀られた神々

を拝み、門付け

途中で宿泊する

家では「家祓い」

（家祈禱）もおこ

なう。明治末ま

で徳島県の経済を支えた

薬（藍の染料）の生産過程においても、藍師は高品質な薬を製造するために先祖伝来の技術を駆使したが、正月には三番叟に藍神を拝んでもらっていた。



2001年まで使用していた三番叟まわし門付け用具一式（国登録有形民俗文化財第12号）

迎える文化

三番叟まわしの門付けは、毎年決まった日時に訪問することを慣わしとする。保存会も電話やハガキでの訪問予告をおこなわない。門付け先では来訪予定日をカレンダーにしている家もあり、正月儀礼として「迎える文化」が生きている。新しい歳を迎えた家人は、歳神を誘う三番叟まわしの来訪をもって新しい年のスタートを切る。その信仰に裏打ちされた迎える文化の諸相は、二〇一一年から四年間おこなった阿波木偶三番叟まわし調査での聞き取り内容からもうかがえる（以下、年齢は二〇一二年時点）。

「家族の頭をなでてもらうと、一年無事に過ごせ

るようにと念じながら神妙な気持ちになり、とてもありがたい事だと思っている」（脇町四九歳女性）

「ありがたい。痛い所を治してもらいたいため、な

でももらった。（門付け以外に）引越しの時も拝

んでももらった」（脇町五六歳男性）

「家に不在の者がおれば、その者が着ている服を

なでてもらった」（池田町六七歳男性）

「皆、三番叟に苗床を拝んでもらうのを待って

た。おぐろ（もぐら）が入らないと言ってまわして

もらった」（池田町八七歳女性）

「三番叟は農業がうまいこといく」（三加茂町男性）

「製氷業をしていた関係で冷却用井戸は格別に大

切にして、正月に三番叟に入念に踏んでもらった」

「歳は年末に閉めたら、三番叟に踏んでもらうま

で開けないならわしであった」（三加茂町八八歳男性）

しかし、科学技術の急速な発展は、旧来からの

地域コミュニティや習俗を変化させてきた。門付

けを迎える文化は、門付け芸人とそれを迎える家

人により、かろうじて紡がれているのが現状である。



中内正子（現阿波木偶箱まわし保存会会長）が師匠と門付けし、門付け先の一部を受け継いだ（徳島県東みよし町、2000年）

死者と生者をつなぐニムチャー衆

——八重山・小浜島の旧盆

ンカイ（迎え） 旧暦七月二三日

一九九四年八月、小浜島の民宿にて旧盆三日間をともしにする。八月二九日（旧暦七月二三日）夕刻は「迎え」。父親が門前で線香を灯し、祖霊を家内の先祖棚まで導く。家族一同盃を回して拝礼する。その夜は猛烈な台風が迫っていた。しばらくは長男の平田大一人（南島詩人・演出家）の三線を楽しんだが、早々に雨戸の太いかんぬきを締めて休む。台風のは遅く、翌日は時速二〇キロメー

トルで終日吹き荒れる。

三日目の旧暦二五日、台風一過で雨戸をあけると、周囲の建物はなぎ倒され、見渡す限り何も無い。風速計は七〇キロメートルで吹きちぎれたという。この日はウクライ（送り）の日にあたるが、盆行事は果たしてできるのだろうか。

ニムチャー衆の家廻り 旧暦七月二五日

しかし午後三時過ぎには、ニムチャー（念仏者）衆の家廻りが開始された。本来は盆の夜三日間かけて、北・南集落民の一行が各々全戸を廻る。それを一日でやろうというのだ。

子ども・青年の踊り連と歌・三線奏者に、中学・高校生の笛・カネ・太鼓の鳴り物がつく。庭先に入ってきたリーダーは「この屋敷のご主人様・奥方様、子どもたちをみな引き連れて焼香に来たニムチャー（念仏者）はわたしたちですよ」と口上を述べ、家主は正装し、直立不動

で迎える。

年長の役員たちが座敷にあり、先祖棚にお参りする。その間バックでは念仏歌の奏楽を絶やさない。子どもたちは演奏者たちを囲みぐるぐる巡りつつ、自身も旋回し手に持つフサやクバ扇をふりかざす。その姿は、まるで光り輝く回り灯籠のようだ。



旧暦7月16日の胴肌願いのニムチャー衆。鉢巻きを赤に替える

続いて祝いの開始曲「御前風」にはじまり、余興の踊りなどが次々と披露され、最後は全員モイヤ（自由乱舞）でしめくくる。芸達者の家系ほど盛り上がりを見せる。帰省できなかった兄弟たちから、「音だけでも聞かせて」と電話が入る。

深夜、カネの音が「送り」の時刻を告げ、神聖な時間が戻る。また来年いらして下さい、と家族そろって拝礼。手土産や杖をもたせ、父親と長男が門口に出て、墓の方向に線香を大きく回してご先祖様を見送る。



上：盆の先祖棚の飾りと供物。棚中央にかけられた帯飾りは小浜島独特のもの
下：ニムチャー衆の家廻り。笛・歌・三線をなかに、子どもたちが周囲を踊りまわる（掲載写真はすべて1994年に撮影）

胴肌願い（生者の健康祈願） 旧暦七月一日

小浜島で驚くのは、「送り」後日付が変わると、深夜から再び家々を廻り直すことだ。今度は生きている者の健康祈願だという。鉢巻の色は白から赤に変わる。早朝には中道（集落中央の十字路）で北と南の芸能が対峙。花笠、女装姿のニムチャール衆が念仏歌のテンポを倍速で揺らしながらうたう「ジルク」や、めずらしい「ミンママ念仏」が踊られる。午後は最年長宅から廻り始め、最後に獅子舞が出て盆のケガレを祓う。

あの世との交歓

ところで琉球弧各地の「家廻り」といえば、沖

縄の「盆行事」と並んで奄美の「節行事」が知られている。一年が夏と冬の二季であるという季節感に基づき、収穫を終えた夏を一年の始まり（夏正月）として「節行事」をおこなうのである。この時期、奄美北部では集落民が八月踊りを踊り、夜を徹して家々を廻る。祖霊を迎えあらたな年の安全と繁栄を祈るのである。島外で暮らす出身者は、一月の「冬正月」には帰れなくても「夏正月」には戻りたがる。結婚や赤ちゃん誕生、新築など人生の節目と重ね合わせて再会を喜び、歌・踊りであそび尽くすのだ。

小浜島の旧盆の「家廻り」は「盆行事」ではあるが、右記の「節行事」と同質の熱っぽい交流が

家ごとに繰り広げられる。のみならず、多様な念仏歌をおして死者を供養し、あの世との交歓が重ねられるのが特徴的である。ニムチャールの一団は、かつて遊行の僧が家々を廻り、念仏を唱えた姿を偲ばせる。



旧暦7月16日の獅子舞（石垣市宮良のイタシキバラにて）。盆の期間に祖霊と一緒にやって来た無縁仏や悪厄を、獅子が祓う

春を呼ぶ黒森神楽

遠藤 協 映画監督・プロデューサー

岩手県宮古市の黒森神社に伝わる黒森神楽は、正月になると陸中沿岸の南北一五〇キロメートルにわたる広大な地域へ「巡行」と称する旅に出る。各地の篤志家の家を「神楽宿」とし、そこで一夜の神楽を演じては、家内安全や大漁を祈ってきた。神楽衆はまた、神楽宿を拠点に、村内の家や店を

訪ねる「門打ち」をおこなう。黒森神社の神霊を移した「権現様」（獅子頭）を携え、悪魔祓いや火伏せの権現舞を舞うのだ。先の東日本大震災の大津波で、神楽衆も、迎え入れる人たちも深い傷を負った。しかし、巡行は沿岸の人びとの願いを受け止めながら三四〇年以上続けられている。

陸中の人たちはよく「神楽がくれば、春はもうすぐ」と口にする。春の先触れである神楽が来れば、厳しく長い冬の終わりは近いというのだ。念願の村開き

二〇一七年二月。映画「廻り神楽」の撮影のため、

筆者は岩手県釜石市根浜の高台を訪れた。整備された宅地に新築の家がまばらに建ち、槌音が響く。笛と太鼓、手平鉦を打ち鳴らす一〇名程の黒森神楽衆が新築の家々を訪問する。今日は高台に移転した集落の「村開き」の祝いなのだ。権現様がカタン、カタンと軽妙に歯を打ち鳴らし、家の柱や四隅をかむ「柱固め」の舞で厄を祓い、一家の繁栄を祈る。住人の頭や肩を同じようにかんで「身固め」とすると、みな清々しい笑顔になった。

この日、神楽宿を提供したのは、地区で唯一流されずに残った旅館の女将、岩崎昭子さん。鉄筋コンクリート四階建ての旅館は二階までが浸水。岩崎さん自身も津波にのまれる壮絶な体験をしたが、九死に一生を得た。地区ではほとんどの家屋が流され一七名が亡くなった。

苦労に苦労を重ねた六年が経ち、岩崎さんは念願の「村開き」に門打ちをしてもらった。新築の一軒一軒が柱固めされるたび「守られるなー」と大喜びだった。

震災直後の黒森神楽

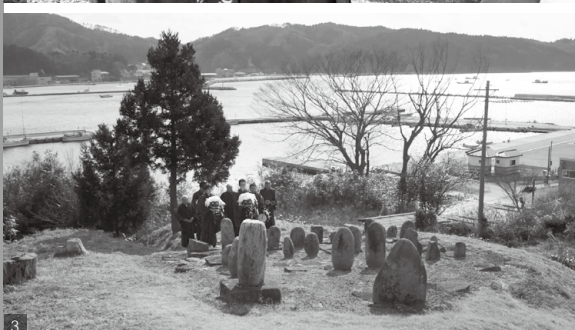
黒森神楽は震災から三カ月後の二〇一一年六月に早くも活動を再開し、避難所で慰問の神楽を披露した。さらに、訪れた各地の浜辺で「神楽念仏」を唱えて、亡き人を弔った。未曾有の大災害を前に、賑やかな舞で人びとを元気づけ、神楽念仏で死者の無念に伝えようとしたのだろう。神仏習合の修験の流れを汲む黒森神楽は、揺りかごから墓場まで、人生のさまざまな節目に応じた儀礼や舞を細やかに伝えている。

神楽衆の代表を務める松本文雄さんが、あると

きこう語った。「死んだ人が聞いているような気がするから手を抜けない」。神楽が好きで、その音色が響いてくるのを心待ちにしていた人たちがいた場所を門打ちして歩くとき、笛吹きである松本さんは、そう思うのだそうだ。

喜びも悲しみも幾年月

この二年ほどは、各地で集落の高台移転が進み、柱固めの依頼が増えていくという。あらたな門出に、権現舞で背中を押してもらおうことは、この地域の人びとにとって心強いものであるに違いない。津波常襲地域三陸にあって、黒森神楽がさまざまな願いに応じる舞と儀礼を伝えてきたことは、故あることではないかと感じる。日々の願いの変化を受け止めながら、黒森神楽は海辺の人びとの喜びと悲しみに伴走しているのだ。



1 海辺を門打ちしながら進む黒森神楽衆
2 民家の庭先で舞う「権現舞」
3 先人の墓標の前で唱える「神楽念仏」
4 もっとも力強く人気の演目「山の神舞」
5 海上安全と大漁を祈願する「船祝い」
（いずれも映画「廻り神楽」より。ヴィジュアルフォークロア提供）

社会主義期の音を聞く

やぎ ふうき
八木 風輝

総合研究大学院大学博士課程
日本学術振興会特別研究員 DC2



ラジオ局で働いてみました

左から筆者、ラジオ局長、エセンケルディ氏 (2018年)

楽器の音はむかしも今も同じなのだろうか。そんな素朴な疑問を胸に、筆者はモンゴル国のラジオ局を訪れた。磁気テープから流れる音色の違いから、カザフの弦楽器におよんだ社会主義期の近代化政策が見えてきた。

ロシアや中央アジア、そしてモンゴル国で広く浸透していた社会主義体制が崩壊して、三〇年近く経つ。ソ連が崩壊する一九九一年に生まれ、わたしは、大学に入学するまで、社会主義というものをまったく理解していなかった。モンゴル国に滞在し、聞きとりと公文書の内容を参考に、モンゴル国の少数民族カザフ人の音楽史を調査するようになって、社会主義というものを少しずつ感じるようになった。

しかし、音楽の歴史を調査しているのに、人びとの語りや文献中心の調査をしていたため、わたしは社会主義期に演奏されたカザフ音楽を聞いたことがなかった。実際どのような音が社会主義期に鳴っていたのかを知りたくなったわたしは、モンゴル国バヤンウルギー県のラジオ局に向かった。そこに少数民族の音楽アーカイブズがあるというのである。

ラジオ局員(仮)になる

モンゴル国バヤンウルギー県という、首都のウランバートルから西に一七〇〇キロメートル(夜行バスで行くと約二日)のところには、少数民族であるカザフ人が九万人ほど住んでいる。県都ウルギーの中央広場前にある建物の二階に、ラジオ局があった。このラジオ局が、音楽アーカイブズ「アルタンコル(金庫の意味)」を所有しているようだった。



音楽アーカイブズ「アルタンコル」の室内 (2018年)

二階の薄暗い廊下の途中に、「アルタンコル」と書かれた部屋があり、局長の許可を得て、その部屋を見せてもらった。四畳もない部屋には、棚に磁気テープ(直径三〇センチほどの円盤状のもの)が山積

例えば、カザフの弦楽器にドンブラというものがある。しかし、この音楽アーカイブズに収録されている多数の曲からは、同じドンブラという楽器で演奏されているのに、曲ごとに「くぐもった音」と「はつきりとした音」の異なる音が聞こえてくるのである。

こうした楽器音の違いはなぜ生まれたのだろうか。理由は、社会主義がもたらした楽器の形と材質の変化に関係があると考えられる。もともと社会主義になる前のドンブラの弦は家畜の腸(ガット)で作られていた。遊牧を生業としてきたカザフ人のなかで、もつとも長い「糸状のモノ」といえば、腸であった。

それが、社会主義期を経るなかで、楽器の近代化が政策的におこなわれた。そのひとつに、ドンブラの弦をガット弦からナイロン弦へ、胴の形状もダイヤ型から卵型に変えるというものがあった。一九六〇年代以降に録られた曲には、同じ楽器の演奏でもふたつの異なる音が存在する状況があったのである。

社会主義期の終わりから約三〇年が経った現在では、すべてがナイロン弦のドンブラとなつてしまった。この楽器の例のように、社会主義体制が崩壊した現在、わたしが耳にしている音は、「社会主義期の音」とはまったく異なるといえる。この音楽アーカイブズは、今ではもう聞こえなくなった音を残す唯一の記録として、社会主義を知らない人びとに、その時代の音を伝え続けるのだろう。



民族楽器ドンブラ。右2つがダイヤ型。左3つが卵型 (2014年)



磁気テープの内容を記述するエセンケルディ氏 (2018年)



みにされ、それを読み込むためのテープレコーダーとコンピューターが設置されていた。

ここで、局長が一人の青年を呼び、わたしに紹介してくれた。彼の名をエセンケルディといい、アーカイブズにある磁気テープの中身をコンピューターでも聞くことができる音源に変換する作業を担当しているという。局長と彼は、一九六〇年末に設立された音楽アーカイブズの歴史を簡単に説明した後、その作業を手伝ってくれないかと、わたしに依頼してきた。

わたしは喜んで引き受けることにした。これ以降、ラジオ局の一員(仮)として、平日の毎日二〇時にラジオ局に行き、一七時まで磁気テープを回しながら、音楽を聞きつつ目録を作るといふ日々を過ごすことになった。

弦楽器にあらわれるふたつの音

この音楽アーカイブズには、社会主義期にモンゴル国バヤンウルギー県の全域でカザフ人が歌った約二五〇〇以上の曲が収録されている。それらの曲を聞くと、当時の音の実態を体感することができた。

展示場再開にあたって

先の「平成30年台風21号」及び「平成30年9月北海道胆振東部地震」により亡くなられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。一刻も早い復旧をお祈りいたします。私も、みんなくでは、去る平成30年6月18日に発生した大阪府北部を震源とする地震により、展示場の設備の損傷をはじめ、研究室、図書室における蔵書の落下などの被害が発生し、臨時休館せざるを得なくなりました。多くの方々のご協力により、その後、復旧作業は順調に進み、8月23日(木)に本館展示場の一部公開を再開し、9月13日(木)、特別展「工芸継承—東北発、日本インダストリアルデザイン—」の開幕にあわせて、本館展示を全面的に再開することができました。この間の、皆様のご支援や温かい励ましのお言葉に対し、心より御礼を申し上げます。今後とも、みんなくの活動にご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

国立民族学博物館長 吉田憲司

特別展
「工芸継承—東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

日本における工芸の近代化、産業化の推進と東北地方の工芸業界の発展に寄与した商工省工芸指導所は、まさに日本におけるインダストリアルデザインの原点の一つです。本展では、商工省工芸指導所の活動を振り返りつつ、日本の工芸品が、どのように世界に挑戦するのかにについて考えます。

会期 11月27日(火)まで
会場 特別展示館

■関連イベント
研究公演

「東北の復興を願って—夢、希望、想いをこめて—」

東日本大震災からの復興への願いをテーマに、三陸沿岸ゆかりのアーティストによるコンサートをおこないます。

日時 10月28日(日)13時～16時35分
会場 本館エントランスホール
出演 濱守栄子(シンガーソングライター) 絵美夏(ヴァイオリンシンガー) 中澤宗幸(弦楽器製作家・修復家)

※申込不要、参加無料

ワークショップ

「オリジナル木製スプーンをつくってみよう」
(京都造形芸術大学との共同プロジェクト)

工芸指導所が開発した成形合板の基礎知識について簡単なレクチャーをおこなうとともに、成形合板でつくった木製スプーンの型をサンドペーパーで削り出し、参加者オリジナルの模様をいれた木製スプーンを製作します。

日時 10月13日(土)、10月21日(日)、11月3日(土・祝)、11月18日(日)
各日11時～15時30分(15時受付終了)
会場 特別展示館2階(各日定員80名)

対象 子どもから大人まで(未就学児は保護者同伴で参加)
※当日受付、要特別展示観覧券
※各日も13時より日高真吾(本館准教授)によるギャラリートークをおこないます。

企画展

「アーミッシュキルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」

無地の服を着て馬車を駆る北米のキリスト教再洗礼派アーミッシュが布の端切れを生かしてつくるキルトは、その鮮やかな色合いや細やかなステッチで人びとを惹きつけています。2011年より収集してきたみんなくコレクションを素材として、キルトに織りこまれた日々の暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流をたどります。

会期 12月25日(火)まで
会場 本館企画展示場

■関連イベント
ギャラリートーク

日時 10月4日(木)、12月20日(木) 各日14時
講師 鈴木七美(本館教授)
会場 本館企画展示場
※申込不要、要展示観覧券

みんなく映画会・第43回ワールドシネマ

「彷徨える河」

先住民の視点で描いた、秘境をとおして彼らの知恵や自然と人間との関係について考えます。

日時 11月4日(日) 13時30分～16時30分(13時開場)
会場 ホテル阪急エクスポパーク 多目的ホール(オービットホール) (定員400名)
※申込不要、参加無料
※参加券を当日11時から多目的ホール(オービットホール)前受付にて配布

みんなく映画会
「映画が拓く新たなバリアフリーの世界」
「盲ろう者(視覚と聴覚両方に障害を持つ人達)」とその家族・支援者の日常生活を丁寧に描いたドキュメンタリー映画「もうろうをいさる」を「完全バリアフリー版」で上映・鑑賞することによって、映像文化共有のあり方について考えます。

日時 11月24日(土) 13時30分～16時30分(13時開場)
会場 ホテル阪急エクスポパーク 多目的ホール(オービットホール) (定員400名)
※申込不要、参加無料
※映画上映は、「視覚障害者対応音声ガイド」および「聴覚障害者対応日本語字幕」つき
※参加券を当日11時から多目的ホール(オービットホール)前受付にて配布

公開講演会
「音楽から考える共生社会」

排他的な考えが台頭する今日、共生は最重要課題の一つです。この講演会では、音楽が共生を実現するために果たしている役割と可能性を探ります。

日時 11月2日(金)18時30分～20時40分 (開場17時30分)
会場 日経ホール(東京、定員600名)
講演 寺田吉孝(本館教授)
中村美亜(九州大学大学院 芸術工学研究院 准教授)

司会 河合洋尚(本館准教授)
主催 国立民族学博物館、日本経済新聞社
※要事前申込、参加無料、手話通訳あり
お問い合わせ先 研究協力課研究協力係
06・6878・8209

みんなくセミナー

日時 10月20日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場 本館セミナー室ほか
参加費 無料(展示を閲覧になる方は、展示観覧券が必要ですが)※参加券を当日12時30分から本館1階案内所にて配布
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内いたします。
第484回

工芸を語る—宮城の職人からのメッセージ

講師 日高真吾(本館准教授)
永山雅大(東北工業大学)
宮城の工芸職人 石橋裕次郎、加藤恵、菅野裕喜
関西の工芸職人 北村繁、藤原千沙、宮永絵里
特別展「工芸継承」では、日本のインダストリアルデザインの原点でもある工芸品を展示しています。ここでは、東北で工芸の制作に励む職人たちが現在の工芸、これからの工芸について考えます。



組み合わせ小箱 (東北歴史博物館蔵)

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と語る

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(画)の最新情報「みんなくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

10月7日(日)14時30分～15時15分 本館第7セミナー室
バリアフリー映画を楽しむ
話者 飯泉菜穂子(本館 特任教授)
※申込不要、参加無料
※手話通訳あり

10月14日(日)14時30分～15時 特別展示館
漆芸の業を受け継ぐ—北村家4代目の作品から話者 日高真吾(本館 准教授)
北村繁(漆芸家)

※申込不要、参加無料(要特別展示観覧券)

10月21日(日)14時30分～15時 本館ナビひろば
ペトナム黒タイの屠
話者 樺永真佐夫(本館 教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
お問い合わせ先 研究協力課国際協力係
06・7220・3094

公開フォーラム
「世界の博物館2018」

日時 11月3日(土・祝)13時～17時
会場 本館第5セミナー室(定員70名)
※要事前申込、参加無料、先着順
お問い合わせ先 研究協力課国際協力係
06・7220・3094

●11月1日から7日は「教育・文化週間」です

教育・文化週間は教育や文化への関心と理解を深め、充実・振興を図ることを目的として設けられ、今年で60回目を迎えます。この機会に、全国で開催される様々な行事に足を運んでみてはいかがでしょうか。
教育・文化週間ウェブサイト(文部科学省ホームページ) http://www.next.go.jp/a_menu/shougai/kyoku-bunka/

●みんなく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直通無料送迎バスを特別展「工芸継承—東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」の会期中に運行します。
運行日 11月27日(火)までの土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分、無料
運休日 平日、11月3日(土・祝)、4日(日)、10日(土)、11日(日)

※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

友の会

友の会講演会(大阪)

※会員無料(会員証提示)、一般500円

第482回 11月3日(土・祝)13時30分～14時40分
特別展「工芸継承」
東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在(関連)
震災を経ても土地に生きる
—南三陸町波伝谷12年間の映像記録を通して—
講師 我妻和樹(映画監督)

会場 本館第7セミナー室(定員50名・当日先着順)
東日本大震災の津波で被災した宮城県南三陸町の漁村「波伝谷(はでんや)」に2005年から関わり続け、震災前後の12年間に波伝谷に生きる人びと「願いと揺らぎ」の2つのドキュメンタリー映画を製作し世に送り出した我妻和樹監督。長年に亘りひとつの地域を患直に掘り続けてきた我妻監督のお話を通して、人が大きな災害を経験してもなおその土地で生きようとする姿、そして地域とともに生きようとする姿がどういふことなのかについて一緒に考えてみませんか。
※講演会終了後、講師の案内のもと、特別展の見学会をおこないます(40分)。要会員証もしくは特別展示観覧券。

第483回 12月1日(土)13時30分～14時40分
特別展「アーミッシュキルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと(関連)」
「アーミッシュの信仰と文化—歴史から現代へ」
講師 踊共(武蔵大学 教授)
会場 本館第5セミナー室(定員96名・当日先着順)
※講演会終了後、企画展の見学会をおこないます(40分)。要会員証もしくは展示観覧券。
【解説】鈴木七美(本館 教授)

東京講演会
第124回 12月8日(土)13時30分～14時40分
野次から応援へ—応援の比較文化論の試みから
講師 丹羽典生(本館 准教授)
会場 モンペル御徒町店4Fサロン
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般500円



想像界の生物相

カワウソ老いて河童になる？

民博 人類文明誌研究部 卯田 宗平



資料名 水虎様
標本番号 H0015887
地域 日本、青森県
サイズ 高さ 25cm × 幅 22 cm

四川省遂寧市を流れる川のほとりを歩いてきたときのこと。目の前に立つ古ぼけた小屋のなかで小さな動物が昼寝をしていた。これを見たわたしは「カワウソだ」と声を上げた。横にいた漁師に後で聞くと、ほとんど絶叫に近かったらしい。

この地域ではカワウソを使った漁がおこなわれていたが、実際に見たのは初めてであった。昼寝中のカワウソをよく見ると、扁平な頭部、ほぼ一直線に並んだ目と鼻と耳、細長い胴体、太くて大きな尾が特徴的である。なんとも可愛い。

こんなカワウソだが、じつは見た目以上に大食漢であり、癡猛である。肉食性のカワウソは、鋭い小臼歯で魚の骨や貝殻まで砕いて食べる。「噛まれたら手に穴があく」とは中国の漁師のことばである。毎日の摂取量は体重の一五パーセントほど。体重七五キログラムのわたしでいうと毎日一キログラムを食べていることになる。さらに、ブラジルなどに生息するオオカワウソは「川のオオカミ」ともよばれ、集団でワニなどを襲うこともあるという。

◆◆河童伝説のモデル◆◆

かつて日本各地にはニホンカワウソが広く生息していた。江戸時代の料理書『料理物語』にはカワウソの項目があり、料

理法として「吸い物」などが挙げられている。当時、カワウソはそれほどめずらしいものではなかったといえる。

日本の河川には河童伝承が広く残っているが、その正体は各地に生息していたカワウソであるともいわれる。古くは室町時代中期に編纂された国語辞典『下学集』に「頼老いて河童に成る」という記述がある。カワウソは尾を支えに立ち上がることができ、平らな頭部に皿をのせているようにも見えるので河童に間違えられたのだろう。

◆◆水難除けの祈願◆◆

今でも毎年夏になると、子どもたちの水難事故が後を絶たない。青森県津軽地方では、湖や川で子どもが溺れると河童に水へ引き込まれたとされる。水辺の事故は河童の仕業だといわれるのである。このため、津軽地方では初夏になると河童の姿をした水神である「水虎様」に水難よけを願う。地元の人たちは、河童の好物であるキユウリを供え、悪さをしないように祈る。

大人たちが水辺を指さし「河童が出るので近づくな」と言うことは、子どもたちの水難予防に意味があっただろう。想像をたくましくしていえば、その警告

は、可愛いがじつは癡猛な一面をもつカワウソとの遭遇を避けるための戒めだったのかもしれない。

そんなニホンカワウソも二〇二二年に絶滅が宣言された。世界でカワウソを絶滅に追い込んだのは日本だけである。自らのモデルを失った日本の河童は、今各地の水辺で何を思っているのだろうか。



右：投網漁で使われているカワウソ（中国四川省、2007年）
左：夜の漁を終え、日陰で寝ているカワウソ（中国四川省、2007年）

新世紀ミュージアム



手話解説のチェックを目的とした手話話者によるモニターツアー(写真提供: 国立台湾美術館)

また、手話といっても世界共通ではなく、国や地域によって異なっており、方言も存在する。さらに、音声言語同様に、話者の文化とも密接な関係がある。

韓国では、二〇一六年八月に韓国手話言語法が施行され、これを受けて、二〇一六年九月から手話の調査研究部門が国立国語院内に設立された。国立国語院では、国立の博物館に手話解説を導入するという取り組みに力をいれ、二〇一七年から現在までのあいだに一六の博物館で韓国手話での解説が提供されるようになった。いずれも流暢な手話

ではなすろう者による解説、というサービスのあり方は、台湾と共通している。日本でも、全国各地の都道府県および市町村で手話言語条例が採択されているが、国レベルの制度に至っていない。台湾や韓国のような手話による解説をおこなっている美術館や博物館はまだ少ない。日本においても、こうした取り組みを可能にしていきたいものである。

言語での解説提供が実現している。また、このサービスを開始する前、本当にわかりやすい案内ができていたのかどうかを調べるために二二名の聴覚障害者を招いて満足度チェックをおこなったところ、九五パーセントの満足度が得られたという。さらに、二〇一六年からは、スマートフォンへのアプリを導入し、館内で提供されている解説の一部が、どこにいても手話と文字で閲覧することができるようになった。

言語としての手話
国立台湾美術館で提供されている手話解説は台湾手話であるが、特筆すべきはこの手話解説が中国語、韓国語、英語、日本語等と同じ位置づけで提供され、来館者が手話を音声言語と同じ、ひとつの言語であると自然に認識できることである。手話は、音声言語とは異なる独自の文法構造をもち、手の動きだけではなく、顔の表情や身体の動きなども用いて文法的な要素を表現する。



展示作品を手話と文字で解説しているモニター(写真提供: 国立台湾美術館)



国立台湾美術館外観

ネイティブ話者による手話・字幕解説
二〇一八年三月に訪問した際、受付で聴覚障害があることを伝えると、展示されている絵を手話と字幕で説明しているガイド端末を借りることができた。この端末を利用すれば、音声ガイドと同様に、絵の背景や要点などが理解できる。二〇一六年から開始された貸出しサービスに加えて、二〇一八年からは、この端末をオープンな形で展示し、至るところで手話案内をモニターでも見ることができるようになった。美術館によると、作品一〇八点のうち四五点について、手話

解説のモニターが設置されているという。聴覚障害者だけが見るものではなく、一般の方も文字をとおして内容を理解することができ、同時に手話という言語にも触れることができる。この手話翻訳を担当しているのは、全員流暢な手話をはなすろう者であるため、わかりやすい

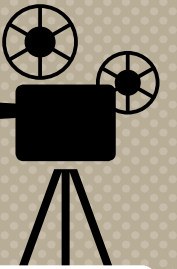
台湾や韓国の美術館・博物館では、来館者のさまざまなニーズに合わせてサービスを提供している。本号では、なかでも手話や文字による解説を積極的に取り入れている国立台湾美術館を中心に紹介する。

アクセシブル・サービスのあり方
国立台湾美術館は台中に位置しており、一九八八年に開館し、二〇〇四年七月にリニューアルオープンした。周囲を緑で囲まれ、来館者からのさまざまなニーズに対して幅広く充実したサービス

を提供している。例えば、月一度、聴覚障害者に対しては手話ガイドツアーサービスを、視覚障害者に対しては視覚を伴わずに楽しめる企画を、他に一人暮らしの高齢者を招いた特別プログラムなどを実施している。展示場には、さまざまなニーズに合わせたサービス内容が一目でわかるように、八つのアクセシブル・デザインのマークが表示されている。



車いす、文字の拡大、点字、手話等のアクセシブル・デザインの表示板(写真提供: 国立台湾美術館)



冒頭数分の挑戦

菅瀬 晶子

民博 超域フィールド科学研究所

映画本来の真価

足首まで届くアバーヤ（外套）に黒い革靴を身につけた少女たちが、教室に並んで立ち、宗教の授業でイスラーム宗教歌を歌っている。あまり集中している様子ではない。なかでも一人だけ、紫の靴紐をとおしたコンパースをはいている少女はとりわけつまらなさそうだ。そんな態度を教師に見とがめられ、彼女は炎天下、屋外に立たされる。見る間に額には玉の汗が浮かび、彼女はむき出しの頭を掌で覆い、ぎらつく太陽をうらめしげに見上げる。

二〇二二年に制作されたサウジアラビア・ドイツ合作映画「少女は自転車にのって」は、こんな場面で幕を開ける。利発だがはねっかえりの少女ワジダが、自転車に乗って近所の少年と対等に勝負したいという、日本や欧米ではごくあたりまえ、しかしサウジアラビアでは非常識きわまりない夢をかなえるために奮闘する本作は、ヴェネツィアほか幾多の国際映画祭で上映され、高く評価された。極端に復古主義的な国教、イスラーム・ワッハブ主義の厳格な解釈ゆえに、映画館が墮落した娯楽として長年禁じられてきたサウジアラビアで制作された初の長編映画であること、しかも脚本も手がけた監督のハイファ・アル・マンスールが、サウジアラビアでは極度に抑圧された存在である女性

であることに、注目が集まりがちである。しかしながら、むしろ本作の真価は、物語に込められたメッセージの普遍性、そしてその描写の巧みさにある。中東の家父長制に抑圧された女性の自立と解放への願いが本作のテーマであるが、物語が進むにつれて、先ほど紹介したわずか数分の冒頭の場面で、監督がじつにみごとにそれを描写していることがわかる。本稿では、映画のあらすじを詳細に紹介するよりも、その読み解きを試みることにしたい。

ワジダの願望と女性の服装

自転車をはしがって母親や教師を困惑させる主人公ワジダの奔放さは、彼女の服装にもあらわれている。

が束縛される傾向があるのはこのためである。

自転車に乗って、男の子と対等に競争したいというワジダの願いは家父長制の因習への挑戦であり、冒頭の場面は、そんな彼女への家父長制社会からの罰である。しかしながらその罰ゆえに、ワッハブ主義の解釈ではヒジャーブを身につけるべき場所で、彼女はヒジャーブを与えられていない。さらにイスラーム以前の本来のヒジャーブの役割を考えれば、彼女への罰には二重の矛盾がある。イスラームの教えの解釈には個人によって幅があり、信心はおのおのの心に宿るとされるが、因習によって解釈がゆがめられることもある。服装や行動、そんな些末なものでしかはかれぬ、ゆがんだ信心の欺瞞。本作は細かな描写で、そこまで踏み込んでいく。自身の密通には口をぬぐい、ことあるごとくにワジダを目の敵にする校長の描写は、その最たる例である。

アブラハム一神教と総称され、源を同じくするユダヤ教とキリスト教、そしてイスラームは、いずれも家父長制に支配された中東の部族社会の宗教として成立した。「父なる神」という唯一の神の表現は、その最たるものである。部族内外の血縁関係が重視される家父長制では、女性に貞潔が求められる。アブラハム一神教において、女性の行動の自由

もう一人の主人公であり、娘に触発されて幼稚な夫から自立するワジダの母親についても触れたかったが、紙数が尽きた。近年サウジアラビアの女性たちの状況も急激に変化しつつあり、先日（六月二十四日）はついに、女性の自動車運転が解禁された。本作で描かれる女性の抑圧は、すでに古いものになりつつある。ヨーロッパで作品を撮っていたマンスール監督も、次作はふたたび母国を舞台にするという。奇をてらうことなく、正統派の手法で勝負できるアラブ世界の映画監督としては、レバノンのナディーン・ラバキーに比肩しうる存在である彼女が、変わりゆくサウジアラビアの女性たちの今後をどう描いてゆくのか、じつに楽しみである。



サウジアラビア、ジェッダ旧市街で見かけた広告。ワジダと同年代の女子児童の制服の広告だが、1年前には女性モデルがポスターに登場するなど、ありえなかったという（2018年）

「少女は自転車にのって」

原題：Wadja

2012年/サウジアラビア・ドイツ/アラビア語/97分/DVDあり

監督：ハイファ・アル＝マンスール

出演：ワアド・ムハンマド、アブドゥルラフマン・アル＝ゴハニほか

2018年6月のみんぱく映画会にて上映しました。

霧の中の出会い——複数の名前をもつ人びと



What's in a name?

いしくら としあき
石倉 敏明

秋田公立美術大学准教授

ヒマラヤ山麓に位置するダージリンは、雨期になると頻りに濃い霧に覆われる。ある朝、丘の上にあるチヨウラス夕広場から徒歩で、動物園の脇をとおってノースポイントを目指そうとしたとき、漏れ聞こえてくる動物たちの唸り声や鳴き声を聞きながら、わたしは昨夜見た不思議な夢を思い出していた。

その夢は、自分の母や妹の死のイメージから始まる。そして、いつの間にかそのイメージは別の女性像に変わり、わたしがかつて一方的に好意を抱いたことのある相手や、思春期からの恋愛の相手が次々にあらわれ、目の前で死んでゆくのだ。死んだと思ったら、別の生きた女性に変身する。一人の女性が次々に変容しながら、生から死へと相を変える。すべての愛する女性が死んでしまったのではないかと、と夢のなかでわたしは恐れたが、大勢のようにも見えたそのイメージは、たった一人分の身体に過ぎなかった。

昨夜の奇妙な夢は、一体何だったのか？ 大切な家族や、何人もの恋い焦がれた女性が、なぜ夢のなかで死んでいったのだろうか？ 彼女たちの名前を辿りながら濃い霧のなかを歩いていると、わたしはふと、テンジン岩という巨岩の前にたどり着いた。霧のあいだからあらわれた、自分よりも少し年上に見えるネパール系の若者が、「こんにちは！」と片言の日本語で話しかけてきた。

彼はネパールから移住したリンブー系移民の子孫で、「ジャパン」という通称だった。ジャパンは盆栽と富士山が大好きな男で、日本の文化への憧れが強く、街では誰もが彼を「ジャパン」とよんでいた。彼は、ブリスバティ・スツパという立派な名前をもっているが、誰もが通称の方を好んだ。わたしは彼とすぐに意気投合し、それから何

年もあいた、友人として親交を結ぶようになった。

ジャパンに導かれて、わたしはダージリン周辺のいくつかの集落に通い、あるとき、ヒンドゥー教のクリシュナ神の生まれ変わりであるとされる、一人の聖者と出会った。この聖者は、チベット系文化を生きるヒマラヤ山麓の仏教徒のあいだでは、転生活仏（トウルク）として認められているという。彼の祖先は、ネパール中央部から移住したグルンの出自をもつので、「グルン・リンポチエ」というチベットIIネパール風の通称でよばれることもあった。ダージリンの寄宿学校で育ったキリスト教徒の英語話者は「クリシュナ・ラマ」という、ヒンドゥー教の神格とチベット人僧侶の呼称が混ざった渾名で聖者を名指した。

インドIIネパール系の文化とチベット文化が劇的に混淆するダージリン丘陵で、わたしは複数の名前を使い分ける人びとと出会った。ネパール系移民が暮らす丘陵社会で活動する聖者は、ヒンドゥー教の「神」としての名前と、チベット仏教の「活仏」としての名前を、状況に応じて巧みに使い分けてきたのだ。聖者は日本から来たわたしを前世の息子とよび、チベット風の名前を与えた。霧のなか、丘陵の街で出会った幾つかの名前は、ジャパンと出会う前夜に見た謎の夢とともに、わたしの記憶に深く刻み込まれた。あの不思議な夢は、結局何を意味していたのだろうか？ そのことは、じつは今もよくわからない。しかし、その後ヒマラヤ山麓の神話を深く研究すると、多くの女神や神々が複数の名前をもち、別の状態に変身する不思議な存在であることがわかってきた。ジャパンとの出会いが、わたしを夢と現実を結ぶ神話の世界に導いてくれたのではないかと、感謝している。

編集後記

今号は門付けを特集のテーマとした。震災のため急遽立てた企画となったが、あわただしいスケジュールのなかご助力いただいた神野知恵さんにはここで厚くお礼を申し上げたい。個人的なことであるが、当方の母方は岩手県出身で小学校低学年くらいまでは避暑をかねて夏休みを祖父の家で過ごすのがつねであった。そんな小生にとって、今号に納められた写真の何枚かには郷愁を誘われた。思えば神野さんとはじめてゆっくりお話ししたのもやはり東北で、学会のため青森空港から弘前市中に向かうバスのなかであった。なお本館の新人歓迎会で神野さんが門付けの太鼓を叩く姿を見る機会に恵まれたが、そちらも堂に入ったものであった。無芸のまままもなく半世紀の馬齢を重ねている小生にはうらやましい限りである。(丹羽典生)

みんなぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんなぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。毎月『月刊みんなぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんなぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんなぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんなぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もごさいます。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



●表紙：伊勢大神楽が各戸で悪魔祓いの獅子舞を演じる姿
(撮影：神野知恵、京都府、2017年)

次号の予告

特集

「動物倫理・動物福祉」(仮)

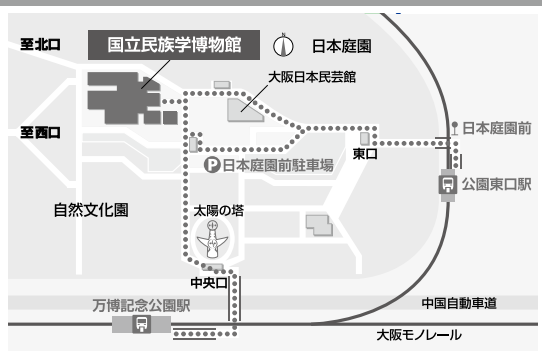
月刊みんなぱく 2018年10月号

第42巻第10号通巻第493号 2018年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾
デザイン 宮谷一欵 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 毎日新聞社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんなぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんなぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんなぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんぱく

MINPAKU

みんぱくの活動を知っていただける展示が各地で開催されています。
みんぱくビーズ・コレクションの巡回展、本館・卯田宗平准教授の写真展をご紹介します。

岡山市立オリエント美術館特別展

みんぱくコレクション 世界のビーズ

昨年度、好評を博した本館特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」の巡回展が岡山市立オリエント美術館で開催中です。みんぱく所蔵の世界各地のビーズ資料のなかから、選りすぐりの約250点を展示しています。人類が10万年前から現在まで作り続けている、さまざまな材質のビーズ。美しく、ユニークなコレクションの数々をぜひご覧ください。

巡回展

ドルフィン・メイトこども園プレゼンツ
国立民族学博物館コレクション
ビーズ——つなぐ・かざる・みせる

会期：2018年11月25日（日）まで

場所：岡山市立オリエント美術館

- ①仮面 ②人像（ビーズ製）
③仮面（ゾウ）④お守り（トカゲ）
⑤イス（神像付き）



岐阜県・長良川うかいミュージアム特別展示

レンズでとらえる中国の鵜飼文化



都市部の河川で操業する漁師たち

卯田宗平准教授に写真展の見所をうかがいました

特別展示「中国の鵜飼——卯田宗平フォトコレクションから」では、わたしが中国各地で撮影した鵜飼漁にかかわる約3万2000点の写真のなかから、「中国各地の鵜飼の風景」「カワウの繁殖技術」「一日の操業風景」などにかかわるものを選びだして展示しています。

漁師がカワウを繁殖させ、卵をニワトリに抱かせ、ヒナを飼い馴らし、今でも生業としておこなわれている中国の鵜飼の姿に迫ります。

特別展示

中国の鵜飼——卯田宗平フォトコレクションから

会期：2018年11月5日（月）まで

場所：長良川うかいミュージアム（岐阜市）